



2022 年

11 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 11 月 20 日 : ルカ福音書 16 : 19 - 26 .

『 レクイエム 』

・ 11 月 27 日 : ヨハネ福音書 12 : 44 - 50 .

『 永遠の命 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

金持ちとラザロのお話です。読者の意表を突く機知に富んだお話です。後のキリスト教会の教義には直結しません。何か、因果応報にまつわるユダヤ人の特殊な伝承が含まれているのかもしれませんが。

当時の金持ちは、高い塀に囲まれた邸宅に居住していました。物乞いがそんな住居の門のところに居据わるのは、ほぼ日没後で、日中は神殿付近や商店街など人通りの多いところで過ごしていたようです。このラザロはベタニアのマルタとマリアの兄弟ではなさそうです。彼はなぜか傷を負っています。その理由が事故なのか、いさかいによるものなのかは不明ですが患部は野良犬に舐められていたようです。ラザロの名前はなぜか金持ちにも知られており、時々、家人や来客の食べ残しに有り付いていたのかも知れません。不憫なラザロは時が来て餓死（病死？）すると、天使たちの手で、天空のアブラハムの懷まで運ばれます。前後して寿命が尽きた金持ちには、なぜか天使たちのお迎えは来ません。死んで地中に葬られた金持ちは、そのまま黄泉に下ります。そこは灼熱の地獄です。苦痛のあまり顎を上げ、振りさけ見れば空の彼方に安住するラザロの姿が見えます。彼は民族の父の懷にいます。そこは生前、恵まれなかった人々の優先席です。どちらも死後の世界です。さらなる死はもうありません。永遠の安らぎか、または永遠の苦悩が待ち受けています。金持ちは、ラザロと違い自分が永遠の苦悩の中へと運ばれたことを悟ります。そして今そこで、耐え難い喉の渇きに襲われているのです。

「父、アブラハムよ、私を憐れんでください」と元金持ちは叫びます。懷中のラザロを黄泉に下して自分の喉を潤すように、仕向けてくれとせがむのです。すると、アブラハムは答えました。両者の間には巨大な奈落が存在し元より行き来が不可能なのだと。生前、優雅に生きたお前は今、反対の立場で喘いでいるのだと。また、生前、苦しみぬいたラザロは、今は安住の居場所を得ているのだと。

元金持ちには遺された兄弟がいました。彼らは今も、全く同じ優雅な生活を送っています。このままでは遅かれ早かれ、全員、黄泉の国で再会することになりそうです。来るべき不幸を察した彼は、今度は自分のことよりも兄弟のことを心配します。懷中のラザロを黄泉にではなく、その手前の下界に遣わして、存命中の兄弟に警告を発してはもらえないかとアブラ

ハムにせがむのでした。虫のいい話です。ところが、こちらも却下されてしまいます。アブラハムは答えました。兄弟たちには守るべき律法があるではないか、これに従えと。無理なら、いくらラザロを復活させて遣わしても彼らは言うことを聞くはずもないと。

モーセ律法は、人間がこれを遵守するには自ずと限界がありました。イエス・キリストの言葉は、その限界を克服して余りある神のロゴスです。どちらも出所は同じ神です、人間の限界を知り尽くす神こそ、この世で命を落とした独り子を復活させてまで、人類を導かれる神です。

譬えて示されたアブラハムの言説は神の御意志でもあります。ただ、キリスト教会の教義に直結するわけではないものの、当時のユダヤ民族の信仰の到達点（乃至は限界）として、アブラハムの懷中に憩う至福のラザロと黄泉で喘ぐ元金持ちの苦悩に満ちた姿が、伝承を用いて語られたのかも知れません。

《 永遠の命 》

イエスの幼少期には触れないヨハネ福音書では、代わりに神がロゴスであったこと、これによって万物が生じたこと、また、そこから命が生じたこと、命が光であり闇の中に出現したことを証言します。

これは、ロゴスである神が受肉し、この世の闇を照らす光として顕現したことを意味します。イエス・キリストとは、そういうお方なのだと。これを信じる者は、闇の中に留まることはない。

私を見る者は、私を遣わした方を見るのである。（１２：４５）

神は、その姿を現すことはない、可視化されない存在だということが真理として語られるとき、イエス・キリストは、どこまでも「故郷に入れられないただの預言者」の地位にとどまります。宣教の始まりにおいては、ご自身、その地位を甘受されました。他宗教ではいまだにそういう扱いを受け続けています。イエスの言葉は神とは無関係ではないものの、彼はただの人間以外の何者でもない。信じてよいのは彼の神性ではなく人性のみ。この場合、イエスを遣わされた神の存在は宙に浮くこととなり、イエスはこの世の闇を照らしたい、ただの預言者となります。同時に神は、下手をすると神話の世界に留め置かれ、言葉だけがこの世に虚しく響き渡

ることになってしまいます。すると、その時人間は、「何か、徴をみせろ。見せてくれたら信じてやる」と横柄な態度を見せます。もちろん彼らが「信じたい」とことと信仰とは、全く異質のものです。ただ、この次元に留まる人々にとっては、それこそが信仰であると誤認します。さらに、この世が不信仰の闇であることの証拠ともなります。彼らは目の前に神がいても、気が付きません。こうして不信仰は、見えているものを見えなくして、その実態は、人間の「罪」として残ります（ヨハネ福音書 9：41）。

父の命令は永遠の命であることを、私は知っている。（12：50）

イエスはそう言われます。では神は永遠の命を一体、誰に命じているのでしょうか？ ヨハネ福音書によると、永遠の命とはイエスを信じる者が一人も滅びないためのもの（3：15・16）であり、同様にイエスの言葉を通して父なる神を信じる者が賜り（5：24）、イエスの肉と血を食する者も賜り（6：54）、同時に、イエスが父なる神から授かった人々が不信仰に陥ることなく、与えられる命（17：2）のことです。では、それと「父の命令」とは、どうつながるのでしょうか？

この福音書の最後に記された「永遠の命」とは、上記のイエスが授かった人々が、唯一の真の神（父なる神）と、神が遣わしたイエス・キリストを見て、認識することである（17：3）というのです。したがって「命令」とは父なる神の強い意志が働いて、イエスがその「認識」を可能とならしめることを意味しているようです。ただ、日常的にはどこまでも実感に乏しいメッセージの一つではあります。なぜなら、この命は、生物学で説明可能な生命とは、明らかに異質（異次元？）の命のようでもあるからです。

ここで、あらためて聖書に記された究極の真理に触れます。

神はその独り子を賜ったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るために。（ヨハネ福音書 3：16）

「永遠の命」は、この句の中で語られるときにのみ、なぜか読者の心に深く入り込み、心を揺さぶります。生物学も死生学もこの言葉の前には沈黙するしかありません。神の真理とはそういうものなのかもしれません。